

まだ昨日のような気がする解像度の高さ

～井上道義の指揮を追いかけた40年

池田 卓夫

ついにこの日が来てしまった。2024年12月30日の「第54回サントリー音楽賞受賞記念コンサート」は井上道義(1946～)にとって、指揮者生活最後のステージだ。

読響で始まり、読響で終わる

今日のオーケストラは、読売日本交響楽団(読響)。奇しくも私の「道義おっかけ」歴は読響で始まり、読響で終わることになった。日本正式デビューだった1976年5月19日、東京文化会館大ホールの日本フィルハーモニー交響楽団第282回東京定期演奏会がセンセーショナルな成功を収めたのを新聞や音楽雑誌の批評で知りつつ、実際に聴く機会が訪れたのは少し後。1978年1月30日、同ホールで読響を指揮した「都民芸術フェスティバル」(日本演奏連盟主催)参加公演だった。

スメタナの歌劇『売られた花嫁』序曲、当時の読響コンサートマスターでチェコ人のボフスラフ・マトゥシエク(1949～)が独奏したチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲、ドヴォルジャークの交響曲第8番(まだ、「イギリス」の副題がついていた)というスラヴ音楽プログラムだった。恩師の1人で「幻の指揮者」と呼ばれたセルジュ・チェリビダッケ(1912～96)が初めて日本に姿を現し読響を指揮したのは、その2ヶ月前の1977年10月18日。まだ肥満も痛風も悪化せず、「気難しい」と思われたマエストロが快活に踊る指揮ぶりに唾然とした記憶も生々しいなか、5歳から18歳まで真剣にバレエを学んだ井上の指揮ぶりは師匠を遥かに凌駕する派手さではないか! まだスキンヘッドではなく「ロン毛」を振り乱し、指揮台で激しく舞い踊る姿に最初は度肝を抜かされたが、聴き進むうちに身体表現の全てが音楽の深いところと結びつき、まれに見る生命力を作品から引き出していく手腕の確かさに2度、びっくりした。

プッチーニとコルンゴルト

糸図をたどれば縁戚(けっこう近い)という縁の深さからか、井上のオペラ指揮もデビューからフィナーレまでを見届けた。最初は1984年2月24日、東京文化会館大ホールの藤原歌劇団公演『蝶々夫人』。目下活躍中の粟國淳(1967～)の父で夭折の演出家、粟國安彦(1941～90)が手がけ、今も「大きな桜の木のバタフライ」と語り継がれる名舞台の初演を担い、東京フィルハーモニー交響楽団を指揮した。世界で活躍したプリマドンナ、東敦子(1936～99)が最後に蝶々さん全幕を演じた貴重な公演だ。

以後も様々なオペラを日本の内外で指揮したが、井上は明らかにジャコモ・プッチーニ（1858～1924）を偏愛している。国内に限っても『トゥーランドット』を1999～2001年に勅使川原三郎演出（東急文化村と英国エジンバラ音楽祭の共同制作）、2009年に茂山千之丞演出（全国共同制作オペラ）、『ラ・ボエーム』を2004年に粟國淳演出（新国立劇場／同劇場への指揮デビュー）、2024年「最後のオペラ指揮」の森山開次演出（全国共同制作オペラ）のそれぞれ2回、手がけている。私は東バタフライの初日と森山『ボエーム』の大千穂楽（11月2日、ミューザ川崎シンフォニーホール）を観ているので、途中たくさんの脱落はあったものの、とにかく出発点と着地点に遭遇、オペラ指揮者としての成熟を見届けた。

もう1つ、井上のオペラ指揮キャリアで忘れられないのは『死の都』の日本初演。ウィーン楽壇の天才児、エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト（1897～1957）が23歳（1920年）で放った出世作ながら、ユダヤ系で米国に逃れ、映画音楽で成功したことが逆にアダとなり、1970年前後まで埋もれていた名作を井上は1996年9月8日、京都市交響楽団と日本初演（京都コンサートホール）、2001年9月13日にはほぼ同じキャストで新日本フィルハーモニー交響楽団と東京初演（すみだトリフォニーホール）も果たした。あるいは日本人として育てられ、指揮者として大成した後には「本当は半分アメリカ人だった」と知った衝撃をコルンゴルトの人生に重ねていたのかもしれない。割り切れない思いを最終的に消化した後、井上は日本人の「育ての父」を主人公に自ら台本を書き下ろし作曲したオペラ、『降福からの道』を2023年1月に世界初演した。

ショスタコーヴィチ

井上の心の痛みと叫び、それでも前に進むエネルギーの矛先はシンフォニーコンサートの分野で後半生、「僕自身だ!」と言って憚らないドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）の音楽へと急激にシフトしていく。2007年に東京の日比谷公会堂でロシアと日本の5つのオーケストラを巻き込んだ「ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト」を敢行して以降、井上は日本各地の楽団とのショスタコーヴィチの凄演で名をとどかせるようになる。

とりわけ、NHK交響楽団（N響）との演奏は強烈だった。定期演奏会デビューは1978年5月で他のオーケストラと大差ないが、今よりもっと過激（どれだけ？）だった32歳の井上は音程からリズムから……N響のすべてを正そうとして反感を買って以来38シーズンもの間、定期の指揮台には上れなかった（他の主催者の公演などは除く）。38年ぶりに招かれた2016年11月25&26日、NHKホールの第1849回定期Cシリーズでは『ロシアとキルギスの民謡による序曲』とピアノ協奏

曲第1番(ピアノ：アレクセイ・ボロディン、トランペット：菊本和昭)、交響曲第12番「1917年」のオール・シヨスタコーヴィチ・プログラムを指揮して大成功を収め、歴史的和解を果たした。

以後、2019年10月5&6日のA定期で第11番「1905年」、コロナ渦中で定期の代わりに行われた2020年12月5&6日の特別演奏会で第1番、2022年11月12&13日のA定期で第10番と続き、「最後の定期出演」に当たった2024年2月3&4日のAシリーズでは前半で『舞台管弦楽のための組曲第1番』からの「行進曲」「リリック・ワルツ」「小さなポルカ」「ワルツ第2番」とヨハン・シュトラウスⅡ世のポルカ『クラップフェンの森で』を洒脱に対比させ、後半を第13番「バビ・ヤール」(バス：アレクセイ・ティホミーロフ、合唱：オルフェイ・ドレンガル男声合唱団)の大演奏で深々と締め括った。

最後に、“浮いた話”の1つもおきましょう。1978年11月25日、神奈川県立音楽堂の日本フィル第26回横浜定期演奏会で前橋汀子(1943～)がブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番を独奏する間、井上の視線が一貫してソリストだけに熱く注がれ、時には微笑みかけたりするのが後々まで、妙に気になっていた。

真相は42年後に判明する。コロナ禍初年の演奏会自粛が解けた直後、2020年7月13日のサントリーホール。日本フィルが行った有観客の特別公演は前半が石丸由佳のパイプオルガン独奏、オーケストラの出演は後半だけで前橋のソロ、井上の指揮によるベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲1曲の予定だった。演奏を終えた井上はトークを始め「僕は前橋さんに桐朋学園時代から憧れ、口説き続け、振られ続けた。たいがい、うまく行くのだけど。だから、アンコールは『ロマンス』!」と叫ぶやいなや後方に置いてあったピアノに駆け寄り、蓋を全開にして最初はピアノ伴奏、途中で管弦楽が加わるお洒落な処理でベートーヴェンの名曲、『ロマンス第2番』を演奏した。さらに「前橋さんを聴きに來たら、これがないと終われないでしょう」と切り出してサラサーテの『ツィゴイネルワイゼン』までサービス、積年の思いを遂げた。究極の職権濫用である。

N響定期最後の出演に先立つインタビューで、私は「引退後の計画は?」と質問した。「何もありません。やりたいことは全部やった」

(https://www.nhkso.or.jp/news/spotlight_202402a.html)